御状本望之
至候、殊新茶
九種御越被入
御念候段、別而
忝存候、何も
致吟味勝申候
先日よりも猶以
能覚申候、今
度初而御越候
花之津三日
之津能御座候
別而花之津
能候つるかと存候
是も我等壷へ
可有御入候、七之
茶もよく御座候、
今少御ねり候て
我等つほへも
御入有へく候、
四之茶ハすくれ
不申候、其外者一
たんよく御座候
恐々謹言

菅織部正

五月十日　定芳（花押）

藤村三入老返報

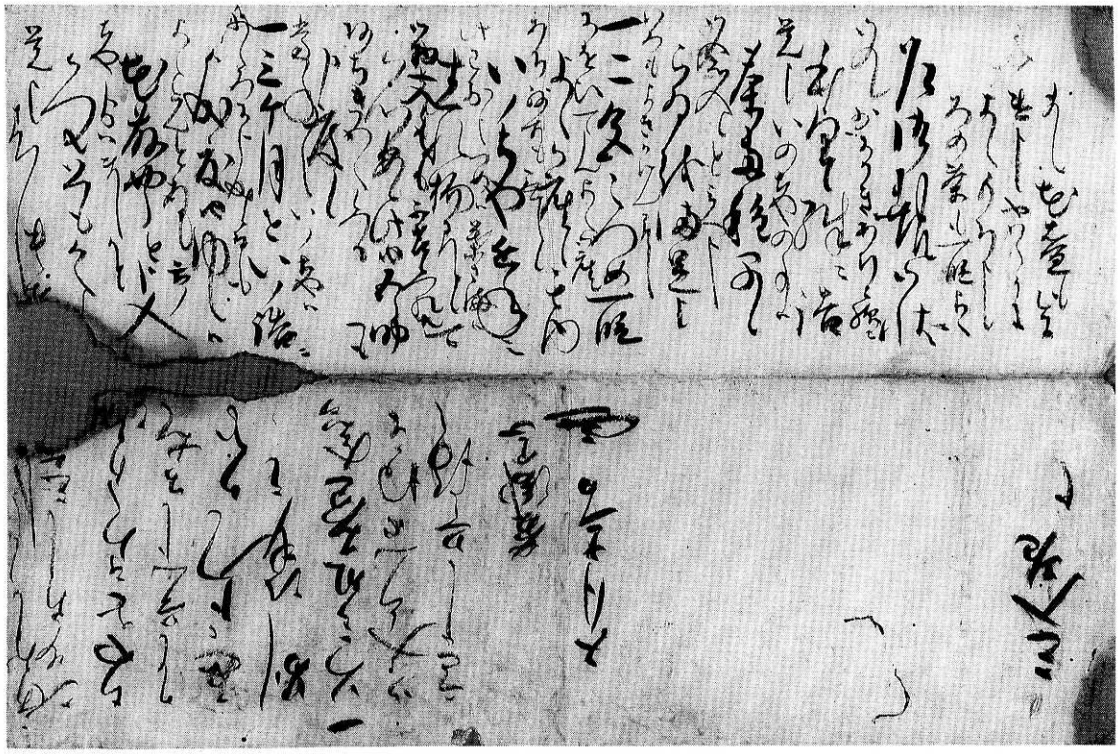
尚々ちや色々
被入御念送給
忝存候、いつれも
当年之茶
去年ニもまし
申候間可御心安候、
上林つめの茶
味卜つめより
白候て味もよく
御座候、貴殿之
つめ之茶被入御
念可給候、匂ひ
ふかきやうに
可被成候、袋数
之儀、此方之注文
のことく御候入て
給へく候、書付いたし
なを〳〵遣候、
以上

〔58〕

と思われる。「白」に対して、引き合いに出される逆の状態を彼らは「青」という。この白と青の対比でもって思い当たるのは、臼にかかって、抹茶に挽き上がる瞬間の独特の光景である。まるで薄い鱗のように、上石と下石の隙間からすべるように出る上質の抹茶は、発色がとても鮮やかである。それに対して、粗くこなれてしまうと、ぱらぱらと石の間からこぼれ落ち、色もやや暗い印象が勝ってしまう。白と青の相違は、このあたりをさすものと考えている。事実、うまく挽き上がった茶の方が、もちろんうまい。ただ、問題はやはり、この季節、新茶でもって、そうした峻別がどの程度できるものか、なんとなく想像できる感覚・印象とズレがあるが、これに関しては実際にいろいろと試してみるほかないのかもしれない。

次の書状も難解である。発信者は後にこれが第三者の目にはいることなど想像もしていないだろうが、読もうとする気持ちをそぐ字面である。

同じく新茶の季節、「い」「ろ」二種類の詰茶の出来がすこぶるいいとする。とくに「い」は近年のすぐれものと持ち上げる。つづく一つ書きの「三日月」「い」「花」「藤四郎」というのは壷、ただその中身との関係がよくわからない。ともかくも「右之通」にせよという。次の一つ書きの「いつミ殿」は、松平和泉守乗寿（一六〇〇～五四）と思われる。お互いの配偶者が近い関係にあるためと、乗寿は将軍家光のおぼえがよく、定芳もそのあたりに一目置いて、茶について世話をやいたのではなかろうか。



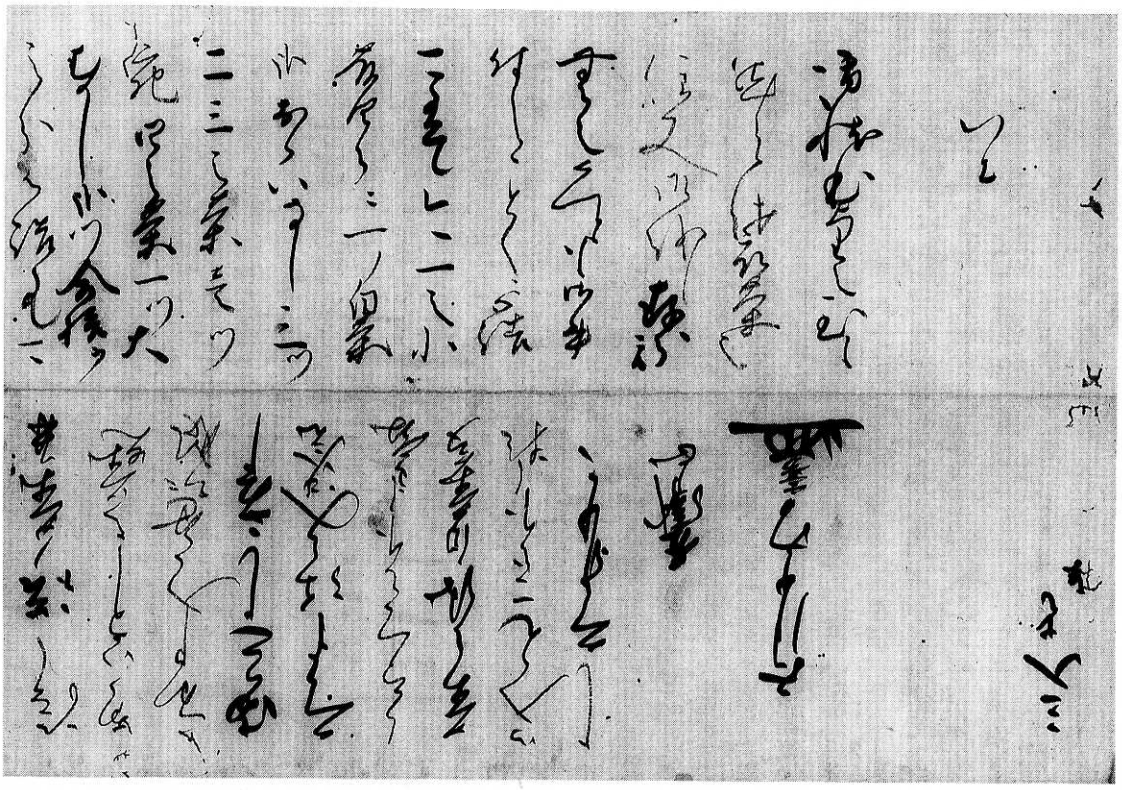
乍御報御状
本望候、殊ニ詰
茶両種早々
被為越満足申候
一二色之つめ一段
よく御座候、其内
いノちゃ近年之
すくれ物にて候、可
御心安候、此由五郎助へも
申渡候、
一三ケ月をいノ詰ニ
被成度由、内へハ
花藤四郎を被入
候へ者、いつもかくし
次第にて候、三ケ［　］
ちゃをきつく申候
かと覚申候間、右之
通ニ被入候、つほ
別次第ニ候
一いつミ殿壷念ヲ
御入候ハん由、得其
意申候、恐々謹言
　五月十二日　菅織部正（花押）
三入老まいる

尚々花壷も今日
遣申候、やハらかに
よくもち申候
ろの茶も一段よく
御入候、少にかきあち之様ニ
覚申候、いのちゃの事ハ
御念入候とミへ申候
いろもよきかけんにて候
にをひ一たんよく御座候
あちも残所も無之候
此已前之つめハ葉さまハ
御物一入候ても不苦候つれ共
あちきつく候つる
当年之いノ茶ハ
ふくろに被成候ても
よく候ハん存申候、旁ノ
ちゃよりハましかと
覚申候、さて〳〵貴殿［　］
忝存候〳〵　かしく

〔59〕

「尚々」以下もやっかいである。まずこの日遣わした「花壷」について「やハらかによくもち申候」と述べる。定芳お気に入りの壷と思われる。次に、本文で誉めた二種類の茶についてあらためて意見を付け加える。「ろ」は、味が少し苦い。「い」は色・味とも申し分なく、「袋茶」にしても差し支えないほどだとする。これまでの詰は、葉の見かけは「御物」にも引けをとらないほど良かったが、味がきつかったと言う。

下の書状は、主として袋茶に関する内容である。「一之小藤四郎」は壷名だろうか。内訳は、「一之白茶」が二袋、「おゝいなし」を三袋、「二」と「三」が各一袋、「四」も一つ、「大むかし」が二袋、合わせて十袋である。これに付き添う詰茶と「おゝいなし」については、指示通りに仕上がった報告をうけて満足だと言う。主殿は弟の田中定官で、彼のもとにも「白茶」を多く入れるようにと付け加えた。前述した当時評判の「白」である。驚かされるのは「おゝいなし」である。摘採つまり茶摘の前に、薗畑（茶畑）では照りつける初夏の日差しが遮光される。一枚ずつの薗全体に仮設の棚（下骨）をこさえて、葭簀と藁でもって、上部と側面をすっぽりと覆ってしまう。こういう茶畑のことを、覆下（おおいした）薗というのだが、「おゝいなし」はつまり被覆しない状態で育成された茶をさすのではなかろうか。菅沼や三入は茶の栽培方法の工夫によっても、茶の品質を模索・追求したのだろうか。

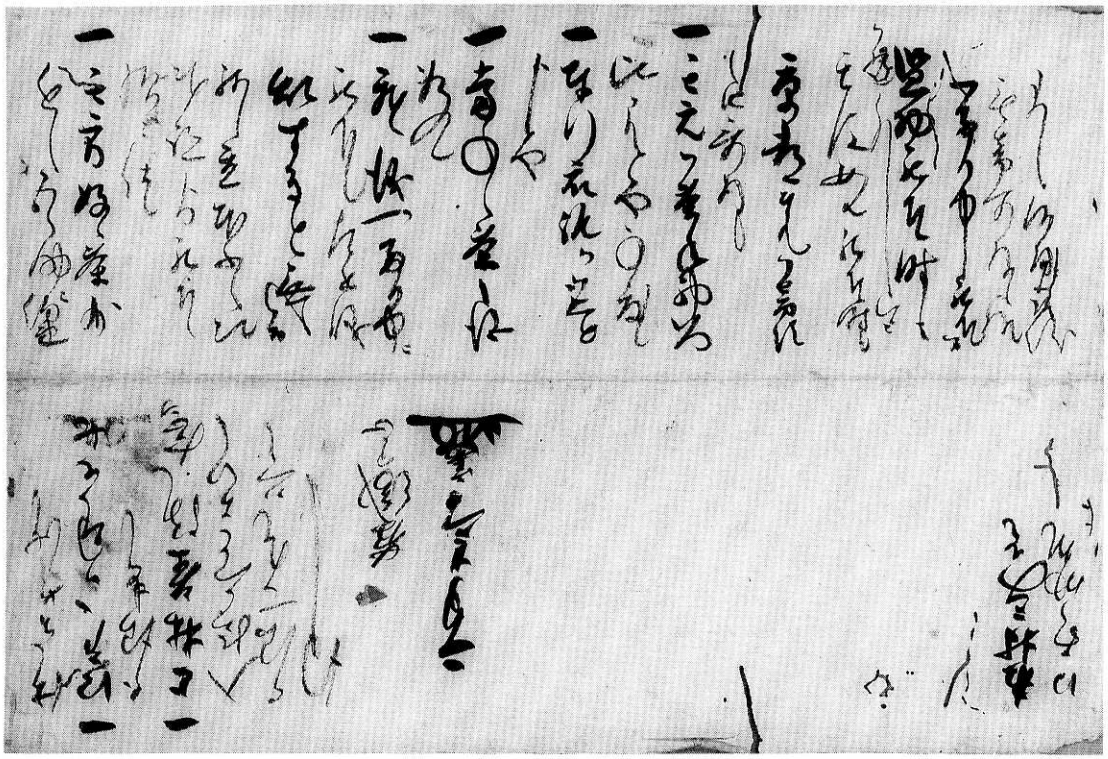


以上

御状本望之至候、　給候、詰ノ茶並
然者袋茶之　おゝいなし之茶先
注文御越候、存分ニハ　度申入候ニ被成候由
無之候へとも御書　満足申候、不及申
付之ことくニ御詰　候へとも弥被入御念
可有候、今一之小　候而可被下候、主殿
藤四郎ニ一之白茶　茶之儀、白茶多
弐、おゝいなし三ツ、　御入候て可被下候、頼
二三之茶壱ツ　申候、恐々謹言
宛、四之茶一ツ、大　　菅織部正
むかし弐ツ、合拾ウ　　五月十五日　定芳（花押）
之分御詰候而可　　三入老参

〔60〕

次に三入と養子の五郎助の両人に宛てた下の書状を見よう。寛永十四年（一六三七）の江戸への出立直前と推察できる。書き出しの監物は、菅沼の三男定房と思われる。定房は、叔父田中定官の養子となるが、若くして亡くなった。一両日中に下向する予定だが、左近つまり長男定昭は体調がすぐれず、後から追いかけるという。菅沼は、三入に「奉行衆」が誰かを教えてほしいという。「奉行衆」とは、将軍の壷を預かる徒頭等のことだろう。これまでは上京してきた一行と関わってきたが、今年はそれができないものだから、気にかかっているのではなかろうか。江戸での用事をことづかると言って、三入に気をつかってみせるが、あれもこれもと気になることが湧いてくるようだ。あわただしく、かつどこか不安気な様子が伝わってくる。

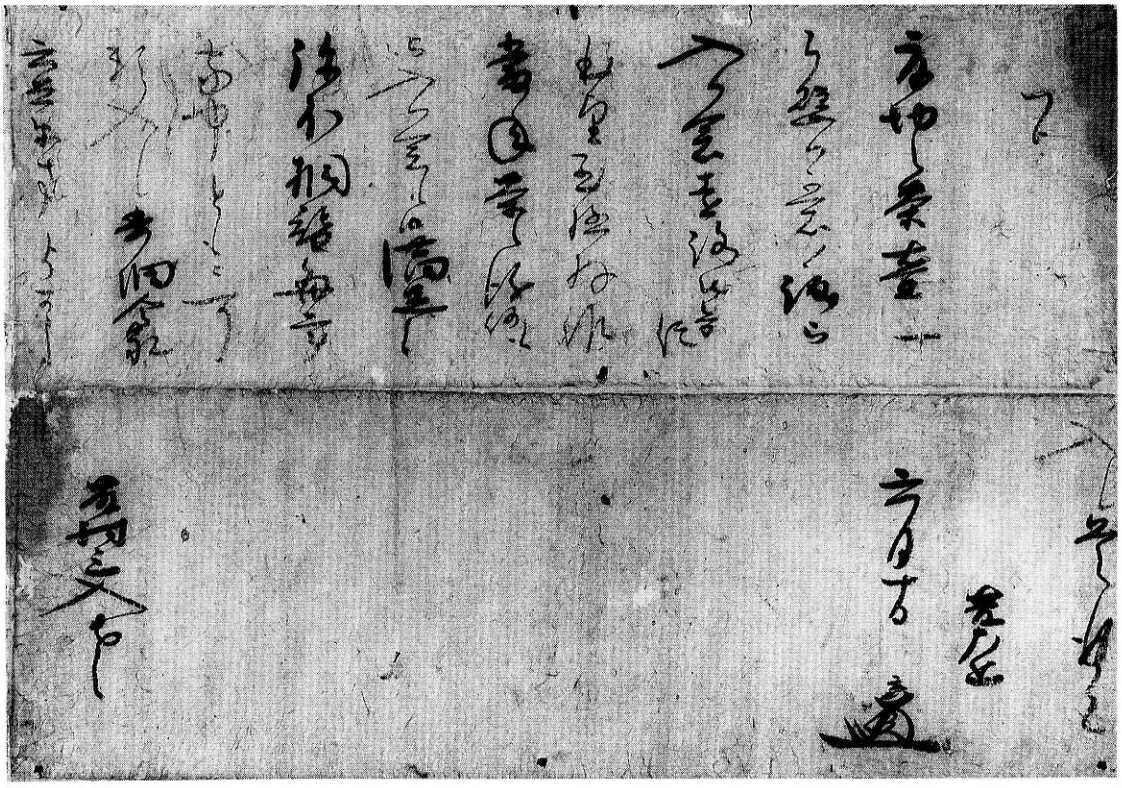


監物罷下候時も　　仕候間如此候
其後女共罷下候時も、　　一江戸へ御用候者可
京都まて御音信　　被仰遣候
之由忝存候　　一上林茶弥々念ヲ
一其元御茶手初いつ　　入給候へとよく〳〵
比にて候や承度候　　被仰可給候、恐々
一奉行衆誰か御上と　　謹言
申候や　　菅織部正
一当年之茶之儀　　二月十三日　定芳（花押）
頼給候　　藤村三入老
一我々儀一両日中ニ　　同五郎助殿まいる
罷下候、左近儀
煩すきと無之候間　　尚々何角取紛
残し置本ふく次　　無音所存之外候、
第跡より罷下候　　一両日罷下候間、
様ニ仕候　　御免給へく候以上
一其方好候茶少
進之候、五郎助ニ約束　　〔56〕

次の五郎助にだけ宛てた書状も、おそらく同年、右の直後と思われる。

乍御報御状本望之至候　　当年之茶別而被入
茶進之候処ニ追付　　御念可給候由、忝候
可有御吟味之由得其意申候　　偏頼存事候、我等儀も
唯今も茶色々進給候　　近辺之衆申合候而

一両日中江戸　　不具候、恐々謹言
罷下候、何事も頓而　　菅織部
罷上、万々可申宣候　　二月十五日　定芳（花押）
猶期後音時候間　　藤村五郎助殿
御報
〔57〕

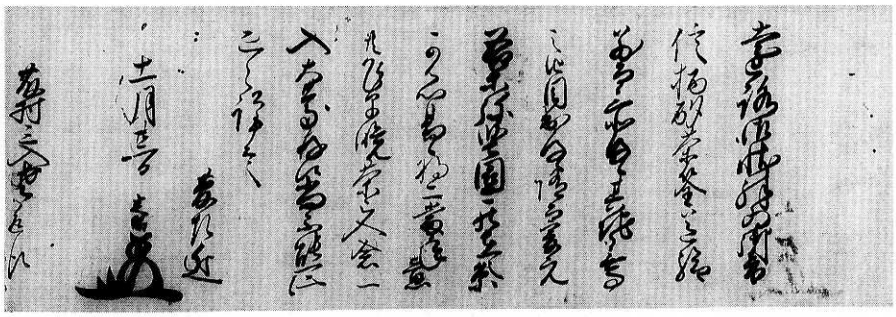


菅沼は江戸城の普請事業の任を仰せつかって下向したが、彼の余命はさして長くなく、寛永二十年（一六四三）正月五十七歳で亡くなった。跡をとった定昭からの三入宛書状は、これまで全部で十通を確認している。そのうち本店には三通、それぞれ花押が異なっている。おそらく上の書状がもっとも若い頃と思われる。

以上　　入候、恐々謹言
夏切之茶壷一　　菅左近
被懸御意候、誠被　　六月十日　定昭（花押）
入御念遠路御音信　　藤村三入老
本望至極存候
当年茶之儀何も
被入御念候由満足申候
弥不相替毎年
家中ともニ可
頼入候、委細今泉
六兵衛方より可申

〔53〕

夏切壷を贈られた礼状である。茶を「毎年家中ともに」とあるように、宇治茶師と大名の取引は、大名個人というよりも「家」へ茶を納入することになるので、まとまった数量になることもあったようだ。



遠路御状殊為御音
信柄酌茶筌送給
別而忝存候、其地御無事
之由目出存候、随而爰元
吾等弥堅固罷在之条
可御心易候、将亦当年壷
共乍早晩茶被入念一
入大慶存候、尚不能一二候
恐々謹言

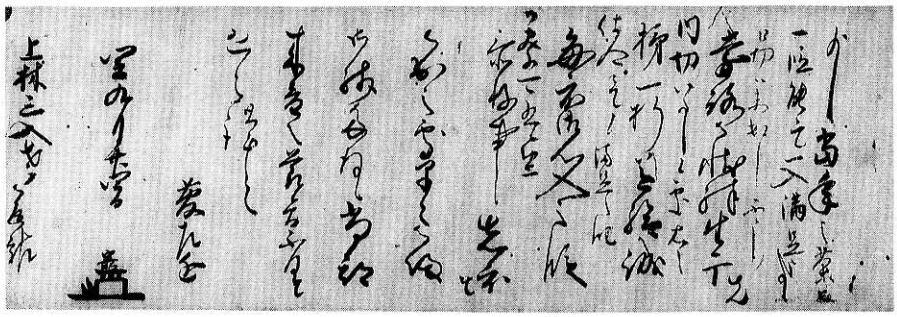
菅左近

十一月廿二日　定昭（花押）

藤村三入老御返報

〔55〕

これは、三入から柄杓と茶筌を贈られたことへの礼である。新春用としてだろうか。今年の茶の礼も添えられた。



遠路御状殊生干
柿一折り送給、誠
毎度御心入之段
忝存事候、先度も
御出之処早々御帰
御残多存候、尚期
来音之節候間、不具候
恐々謹言

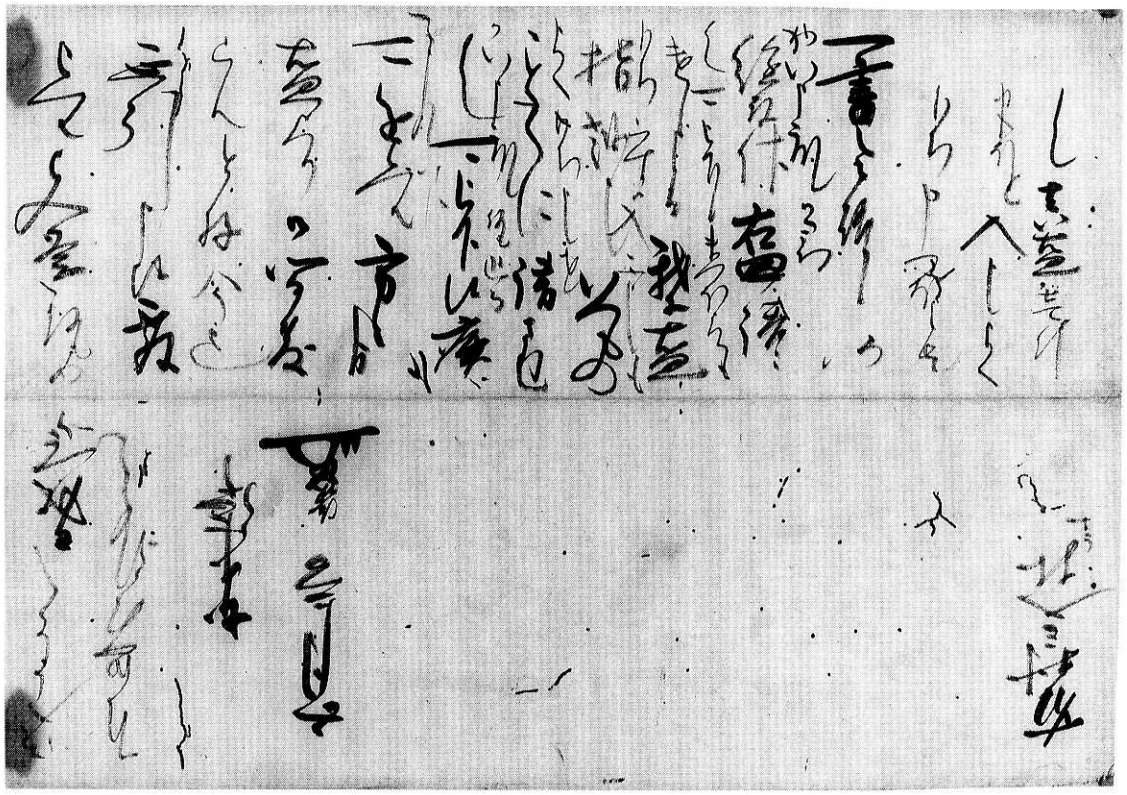
菅左近

閏九月廿四日　定昭（花押）

上林三入老御返報

尚々当年之茶
一段能候て一入満足申事候
口切ハ未出し不申候
内切いたし候処、右之
仕合ニて候満足之段
御察可有候、以上　〔54〕

本状は、閏九月から寛永十九年（一六四二）とわかる。父定芳が亡くなる三か月前である。まず、干柿の礼が述べられる。今年の茶には満足していると言いながら、口切はまだで、ただ内切はしたという。ともかく壷を明けて、詰茶を飲んだのだろうか。あまり目にしない言い方である。なお、宛名の上林三入は二代目である。

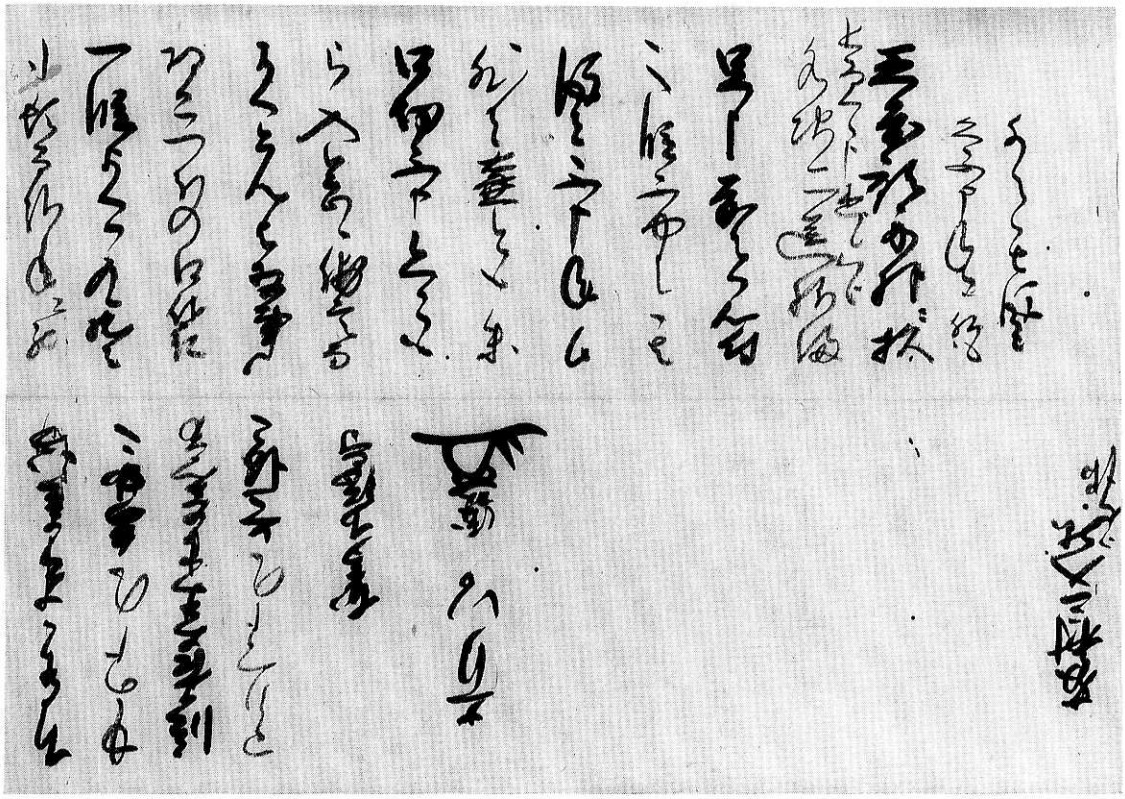


次は、右の菅沼親子と血縁的に近い**本多俊次**（一五九五～一六六八）、定芳の姉の息子からの二通の書状を読もう。

初々しい、若々しい筆致である。縫殿佐つまり父本多康俊の壷は、これ以前に三入のもとに送られたようだ。方々から壷が寄せられる頃なので、あえてそうした慌ただしい時期を避けたという。追而書は、真壷の注文である。一斤半つまり一キログラムほどの葉茶が詰められるほどの大きさというから、いわゆる名のある茶壷や口切の儀式など

一書令啓候、仍　　御入候ことく被成可被
縫殿佐壷詰ニ　　下候、恐々謹言
遣申候間、我等壷　　本下総守
指越申候、いつもの　　五月六日　俊次（花押）
ことくに詰させ　　藤村三入様参
候て可被下候、疾々も
可進候へ共、方々より　　尚々真壷壱斤
壷上り御開敷　　半ほと入申候よく
候ハんと存、今迄　　もち申つほ候者
延引申候、不及　　かい申度候御尋
申候へ共、被入念何も為　　候て可被下候、まつほニても
もち候ハすハ入不申候も
よくもち申候を
かい申度候、何も追而
可申入候、以上

〔79〕



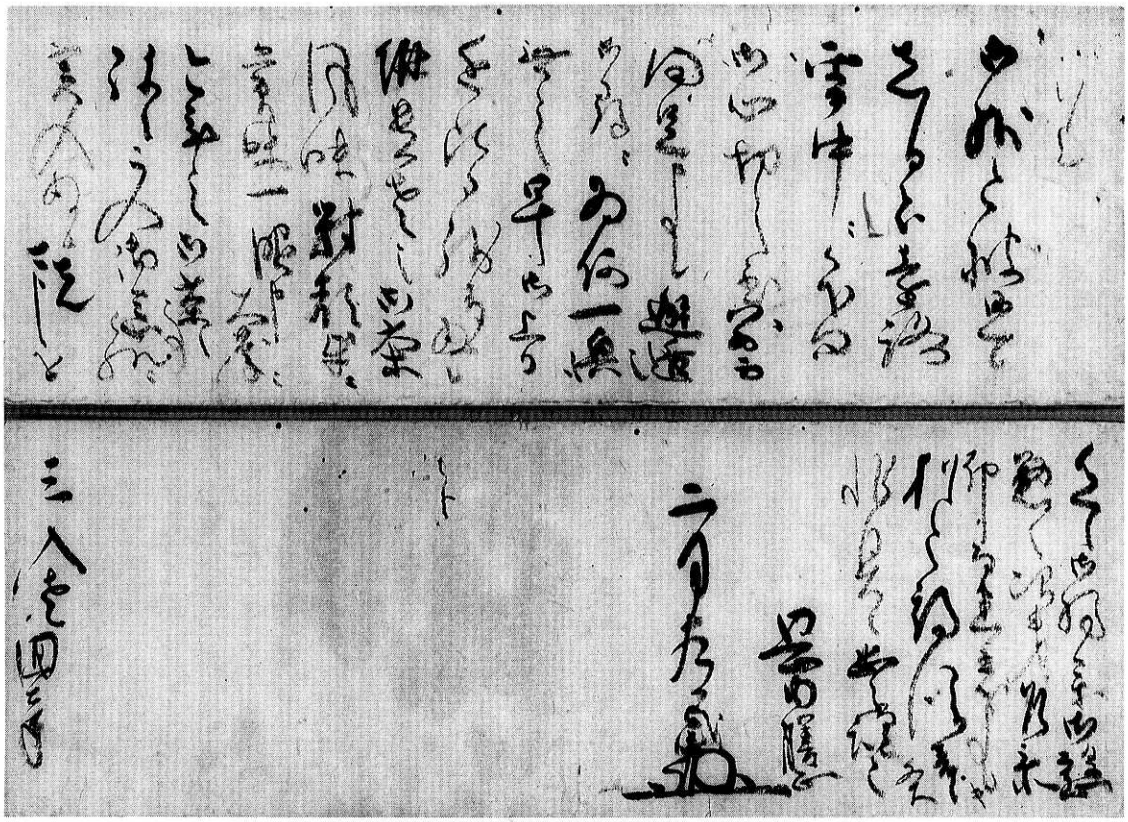
で目にする壷よりも、やや大きいサイズになろうか。条件はそれだけではない。「よくもち申つほ」とは、葉茶を長持ちさせる壷のことだろう。そうでなければいらないという。たしかに、いつまでも風味や色合いを持続させるものがいいわけだが、これは本当は壷だけの問題ではなくて、壷が収納される環境がもっとも重要である。それがどこまで認識されての話なのかわからないが、ともかくこの本多俊次という人は、三入とやりとりをしたなかでも、めっぽう壷にうるさい大名である。他の書状でも、しばしば壷に関して細かい指示を見ることがある。

急度預示殊ニ杉　下候まゝ来春以書
水次二送給満　中可申入候、委曲之
足申候、度々御心付　段善大夫半右衛門方
之段不示申候、其　ヨり可申入候、恐々謹言
後者不申承候　本多下総守
然者壷とも未　十一月八日　俊次（花押）
口切不申候へとも　藤村三入様御返報
被入念候儀、定而
よく候ハんと存事候　尚々其後者
将亦つほの口袋　久不申承候、何も
一段よく御入候、拙者　追而可申達候、以上
も頓而御年ニ罷

〔80〕

前の書状と比べると、かなり書き慣れてきた感がある。文面もさらりと落ちついている。まず杉の水次（水注）を贈られた礼を述べる。次に今年の茶はまだ口を切っていないが、「つほ（壷）の口袋一段よく御入候」とある。このあたりが、具体的にどういう状況かが目に浮かばない。

次に紹介する差出人**岡部長盛**（一五六九～一六三二）も、菅沼定芳と非常に近い。配偶者が姉妹である。長盛も三入と頻繁に書状を交わした人で、二人の親しい間柄は書面かもよく伝わってくる。

以上　　色々御持参御慇
御状令披見候　　慰之次第乍忝
先日者遠路　　却而迷惑申事候キ
雪中ニ御下向　　猶々期後音候条
御心切之至別而　　非具候、恐々謹言
満足申事候、邂逅之　　岡内膳正
御尋ニ為何一興も　　二月十九日　長盛（花押）
無之、早御上り　　三入老回章
近比御残多存候
併貴老之御茶
風味、対顔互ニ
賞味一服申大慶ニ候
今年之御茶之事
弥々被入御念候様ニ
憑入存候、先可申候を

〔39〕